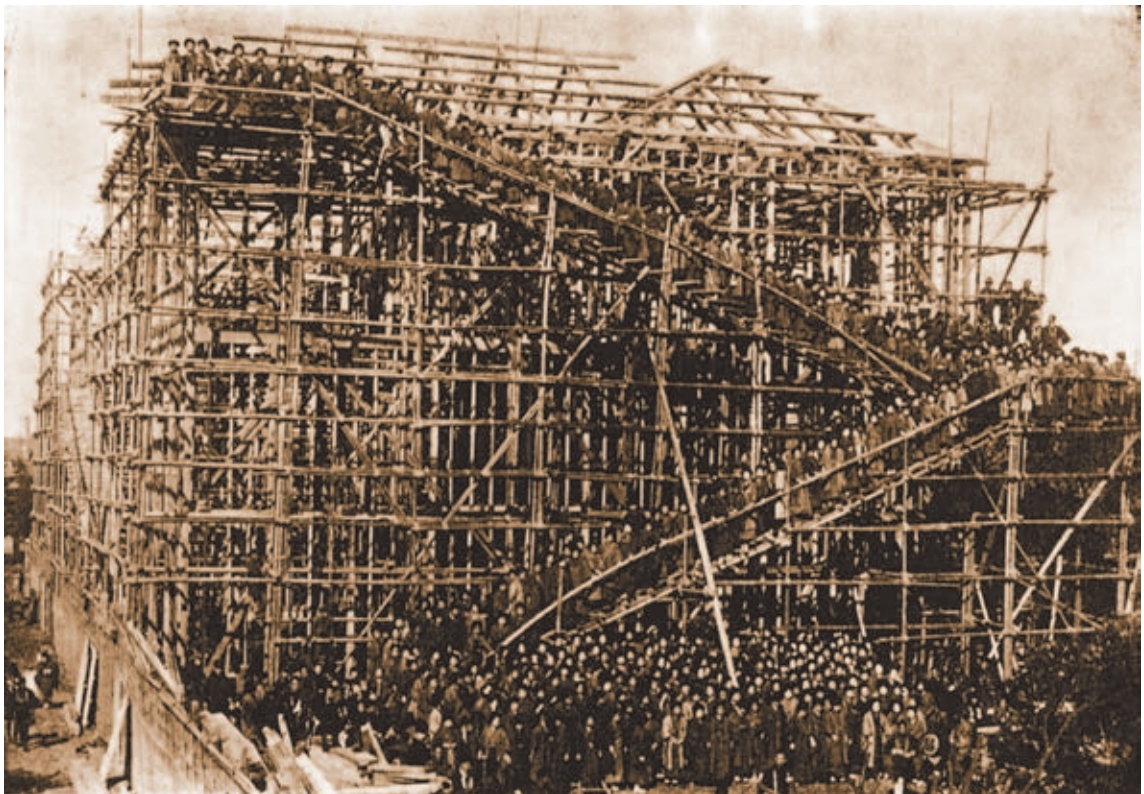


テクネ・マクラ「芸術は永し」

TEXNH MAKPA

女子美術大学歴史資料室ニュースレター

第 2 号



私立女子美術学校 菊坂校舎上棟式 明治42年（1909）2月26日

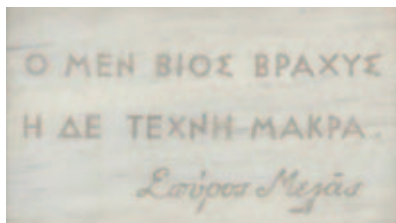
寄贈報告

女子美術大学創立60周年記念碑板 原型のご寄贈

内藤 幸江

『TEXNH MAKPA テクネ・マクラ』創刊号の表紙に女子美術大学創立60周年記念碑板の拓本を掲載しましたが、そのことがきっかけとなり、碑板原型をご寄贈いただくことを報告します。

2010年7月中旬、小松弘光元学長が同窓会松山支部開催の展覧会を訪れ、更に本学60周年記念として佐藤志津胸像を製作した人物である乗松巖先生の記念館「財団法人 乗松巖記念館 エスパス21」に寄られました。その際に乗松先生の甥で、現在の館長である乗松毅氏より「創刊号表紙の写真と同じ様な大理石の碑板がある。女子美の110周年、また伯父の生誕100年である記念すべき年にこの碑板を寄贈することができたら伯父も喜ぶであろう」というご提案をいただいたため、後日、佐藤善一常務理事、原聖歴史資料整備委員会委員長、内藤が同館に伺い、拝見しました。【写真1】



【写真1】60周年記念碑板 原型 大理石

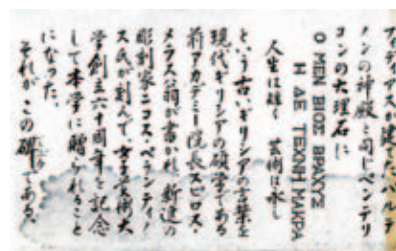
本学にある碑板は杉並キャンパス内に設置されている石碑に埋め込まれています【写真2、3】。これは、昭和32年～41年（1957-1966）に建設した杉並キャンパス本館、2、3、4、5、6号館の竣工を記念した定礎として建立されたものです。

調査した結果、毅氏をご所蔵されていた大理石の碑板は、本学に設置されている碑板の原型であることが判りました。この度、毅氏のご好意により歴史資料室にご寄贈いただくことになりました。

また、碑板原型と併せて、昭和35年（1960）10月に書かれた「碑の由来」が記された書類の写しをご寄贈いただきました【写真4】。その文面によると、巖先生がギリシアで日本大使館の黒田音四郎大使の晩餐会に招かれ、その席で「オリンピアの火」を女子美術大学へ持ち帰りたいことを熱く語ったことが書かれています。飛行機に火を持



【写真2】60周年記念碑板



【写真4】「碑の由来」書類写し（部分）

ち込めなかったため、その代わりとしてパルテノン神殿と同じ石切り場である「ペンテリコン」の大理石に「人生は短く芸術は永し」という句を刻んだ碑をいただくことになったそうです。

毅氏にお聞きした話では、巖先生は碑板がスーツケースなどと一緒にして乱暴に扱われる事を懸念し、飛行機の中に手荷物として持ち込み、日本まで運んだそうです。

また、巖先生は後年に真夏にもかかわらず、腹巻の中のカイロ（携帯用暖房器具）に火種を入れ飛行機に搭乗し、見事、「オリンピアの火」を持ち帰ったという後日談もお聞かせいただきました。

今回、ご寄贈いただいた碑板は歴史資料室では大切に保管し、調査・研究を進めるとともに、今後、公開する機会を設けるべく検討しています。

（歴史資料室室長）



【写真3】杉並キャンパス内に設置された碑板が埋め込まれた石碑

女子美のはなし

伊藤 仲

女子美を卒業した実業家

吉田 麻里

第2回目は伊藤仲*さんという人を1冊の本からご紹介いたします。

伊藤仲さんは、当時のジャーナリスト田村江東氏の『女性と職業 4 活動せる実業界の婦人』〔明治41年（1908）、博文館〕に「黒リボン＝女子美術学校出身の伊藤なか子」という題で紹介されています。

仲さんは明治14年（1881）5月に播州明石樽屋町（現：兵庫県）の鹽谷嘉助の三女として生まれました。小学校卒業後、煙草商を営む伊藤岩三郎さんと結婚し、煙草の仲買を始めましたが、思うように行かず、砂糖商を営んでいた本家にお世話になります。しかし、生活状況は芳しくなく、岩三郎さんは独立して親類を見返してやりたいと常に口にしていたようです。病弱で温順な夫に代わり、仲さんは固い決心の下、明治34年（1901）秋に幼い娘を残し、医者か歯医者になろうと単身東京へ出て行ったのです。

紆余曲折の末、女子美術学校に編物・裁縫等の科目があることを知り、上京した年の12月に私立女子美術学校の編物科選科普通科へ入学しました。仲さんがこの学校を選んだ理由は、指先の仕事が器用出来ることから、それを生かした仕事が出来ないかと考えたからでした。

仲さんは、在学期間2年の間、郷里に帰ることなく夏休みも絹糸の原料を買い、様々なものを編み、里の商人を仲立ちに販売をして過ごしました。

学校の授業について「（前略）他の滔々たる慰み半分のお稽古や、お嫁入りの時に媒介人が数へ立てるのが着の数を殖やす為の勉強とは大分違ふ（後略）」と記されているように勉強内容も仲さん自身の学ぶ姿勢も熱心な様子が伺えます。仲さんは、明治36年（1903）3月に優等の成績で卒業した後、明石に戻り、再び夫と共に上京しました。本郷の東竹町に毛糸店を出店しますがうまく行かず、夫は糸類の行商、仲さんは自宅で編物教授や美術学校の教師で生計を立てていました。

転機が訪れたのは女学生の間でのリボンの流行でした。仲さんが下谷の西町にリボン専門店を開業すると、商売は軌道に乗り、馬喰町の板新町へ移転します。商いは益々繁盛しましたが、残念なことに移転後、夫は明治39年（1906）12月に亡くなりました。故郷の親戚等は仲さん母娘に戻ってくることを勧めました。しかし仲さんは、夫と二人で興した事業を成功させ、娘に婿養子を貰い伊藤家を継がせたいという思いから郷へは帰りませんでした。結果として仲さ



田村江東『女性と職業4活動せる実業界の婦人』
明治41年（1908）、博文館より

んの堅実で才気ある経営術は成功しました。和製リボンのみならず、外国製のものも取り扱うようになり益々事業が拡大してゆきました。

田村江東氏は「女子美術学校は創設以来既に六七百人の卒業生を出して居る、中には立派な美術家となり、教員となり、婦人となつて居る人も少なくない、然しなか子の如き質の成功者は蓋し珍しい、彼女が堅固なる志操と機敏なる才能は、如何にも能く校長たる佐藤男爵夫人の訓戒を發揮したもので、其成功は只彼女自身の名誉なるのみならず、実に其の母校たる女子美術学校の誇である。」と最後に述べています。

伊藤仲さんについてはこの資料のみですが、確かに同窓会の昭和5年（1930）の『女子美術専門学校名簿』にも名が残っています。

彼女のバイタリティ溢れる姿は目を見張るものがあり、当時の代表的な女子美生としての姿が想像できます。そしてその姿は、現在の女子美生にも通じるものを感じます。

*伊藤仲さんのお名前は当時、様々な形を取られていますが、本学資料から本文では「仲」に統一いたしました。

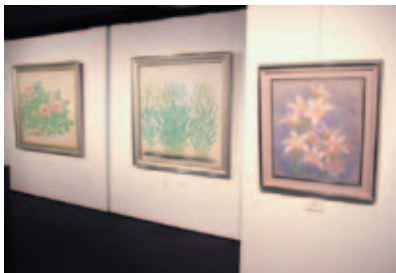
（歴史資料室）

取材レポート

長山はく展を訪ねる —長山昌弘館長インタビュー①

〈インタビュー・文〉 山田 直子

2010年9月、角記念美術館（日立市）にて企画展「長山はく日本画展」が開催されました。長山はくは大正4年（1915）私立女子美術学校日本画科を卒業し、官展で入選・特選するなどの活躍をした日本画家です。平成7年（1995）に永眠されますが、その後、甥にあたる長山昌弘氏の尽力により長山はく記念館（茨城県日立市）が開館・運営されています。このたび企画展の会場を訪ね、企画者でもある昌弘氏にお話をお聞きしました。



会場風景

○長山はくの幼少期について
—まず、はくさんの幼少期のお話をお聞かせください。明治26年（1893）、茨城県多賀郡高鈴村（現日立市）にお生まれになりますが、どんな幼少期を送られたのでしょうか。

長山昌弘館長（以下、「館長」）：長山家は江戸時代、水戸藩から陸前浜街道（東京から宮城県岩沼市までの太平洋岸の道）を取

り仕切る権限を与えられ、日本橋に海産物・穀物の店を構えていたといいますが、明治維新のときに一度、没落します。そこへはくの父である萬治郎が婿に入り、長山家を建て直しました。はくの少女時代はそれほど豊かではなかったでしょうが、萬治郎は助川郵便局長となり、娘を東京の学校に通わせることができるようになったと思います。
—一説には家の床の間に有名画家の軸が掛かり、身近に芸術に触れる環境に育ったといわれていますが。

館長：床の間に有名画家の軸が掛かっていた話についてはよくわかりません。ただ、親類の中に絵馬を描いた女性がいたと聞いています。江戸時代のことです。はくの伯母くらいにあたる人です。その絵馬は近くのお不動さんに掛かっていて、はくも評価していました。

○私立女子美術学校入学へ

—はくさんは茨城県立水戸高等女学校を卒業後、上京し、明治45年（1912）4月に私立女子美術学校の日本画科本科高等科に入学されます。きっかけは何だったのでしょうか。

館長：そのあたりはわかりませんが、はくを自分の娘のように

可愛がっていた叔母がいて、その人は東京に勉学に行った人だそうです。それに、水戸高等女学校から女子美に入学した人が何人かいたようです。

—お姉様が英語の通信教育を受けていて、その方が東京のいくつかの女学校の案内を取り寄せたというお話もありますが。

館長：そのようなこともあったかもしれません。いろいろな手を使って父親を納得させたのだと思います。はくは実家に「女子美の裁縫科に学ぶ」といって卒業までそれを通したようです。当時は、女性が絵を学ぶことは理解されていなかったですからね。



女子美卒業の頃の長山はくさん

○日本画家としての活躍

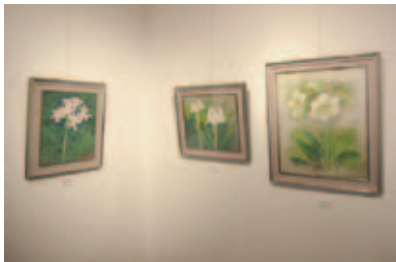
—大正4年（1915）卒業後、女子美の教員・益田玉城の紹介で松岡映丘に入門しましたね。当時は女子美を卒業しても絵を描くことをやめてしまう人がほとんどでしたが、はくさんははじめ

から画家になることを目指していたのでしょうか。

館長：松岡映丘先生のところへ行く前に、まずは寺崎広業先生のところへ行っています。はくの実力についてですが、在学中、はくが描いていた卒業制作作品を他の学生によって密かに汚されたということがあったらしいのです。他の学生の嫉妬を買うくらいですから、実力があったのではないのでしょうか。

—大正11年(1922)、29歳の時、第4回帝展に出品した《やなぎあざみ》が初入選を果たしますね。はくさんは、花を描いたものが多いですが、護国寺に住んでいて、小石川植物園には毎日のように行って写生したようですね。その鍛錬が表れていますね。

館長：はくの植物写生の実力については師の映丘先生もある程度、認めていたようです。他の弟子にも見習うようにしていたと聞きました。(次号に続く)



会場風景

長山はく 略歴

- 明治26年(1893) 茨城県多賀郡高鈴村(現 日立市)に長山萬治郎の四女として生まれる。
- 明治44年(1911) 茨城県立水戸高等女学校を卒業。
- 明治45年(1912) 4月私立女子美術学校日本画科本科高等科に入学。益田玉城に学ぶ。
- 大正4年(1915) 同校を卒業。はじめ寺崎広業に学び、その後、松岡映丘に入門する。
- 大正11年(1922) 第4回帝展に《やなぎあざみ》を出品、初入選を果たす。
以後、5、6、9、10、11、12回でも入選。
- 大正12年(1923) 第1回茨城美術展に《初夏の園から》を出品、県賞受賞。
以後2回で県賞受賞、5回から無鑑査出品。
- 昭和4年(1929) 川合玉堂の推薦で北白川宮家に日本画の進講をする(昭和20年まで)。
- 昭和5年(1930) 父・萬治郎逝去。
- 昭和7年(1932) 第13回帝展に《草原》を出品、特選。
- 昭和8年(1933) 第14回帝展に《朝顔》を無鑑査出品する。
- 昭和13年(1938) 師・松岡映丘逝去。
- 昭和20年(1945) 郷里に作品を運ぶ準備を整えていたが、直前に東京大空襲で焼失。
茨城県那珂郡野口村(現 常陸大宮市)の親戚筋の関澤家に身を寄せる。
- 昭和25年(1950) 第5回日展に《芍薬》を委嘱出品する。
- 昭和32年(1957) 第12回県展に《けいとう》を出品。以後、第20回まで毎回出品。
- 昭和40年(1965) 第1回(日立)市展に《月に咲く》を出品。
以後、20回までほぼ毎回出品。
- 昭和41年(1966) 第1回(茨城)県芸術祭に《月》を出品。
以後、2、3、5、6、11回に出品。
- 平成2年(1990) 水戸市の常陽藝文センター・ギャラリーにて「来し方—一夢」長山はく展」開催。
- 平成4年(1992) 日立市の椎の広場アウリットにて「白寿記念」長山はく展」開催。
- 平成7年(1995) 永眠。

(歴史資料室)

2010年度前期 歴史資料室日誌

4月

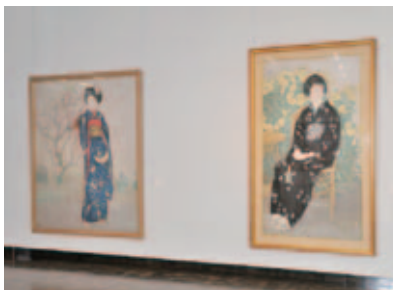
- 自校史教育の講義に協力。
- 杉並キャンパス整備に伴い取り壊しが決定した1号館の備品等を調査。

5月

- 女子美アートミュージアム「日本画をまなぶー女子美術学校における日本画教育」展開催。写真、画手本など所蔵資料を出品。



絵手本（歴史資料室蔵）の展示



会場風景

- 木下直之「股間若衆 日本近現代彫刻の男性裸体表現の研究」(『芸術新潮』第61巻第5号、2010年5月) に写真提供。

6月

- 『女子美術大学歴史資料室ニュースレター テクネマクラ』創刊号発行。
- 三代目校長・佐藤進の縁の地である福島県伊達市梁川 大竹一弘氏宅にて調査。(次号詳細報告予定)

7月

- 女子美術大学附属同窓会にて「女子美のはなし」講話会。

8月

- 独立行政法人国立女性教育会館主催「女性の実業教育のはじまり～チャレンジした女性たち～」展に収蔵資料出品、原稿執筆等の協力。



会場風景

- 女子美術大学創立60周年記念碑板 原型のご寄贈を受けた。

明治・大正期の博覧会受賞時のメダルを発見！！



明治40年（1907）東京勲業博覧会 2等賞メダル



大正3年（1914）大正博覧会 銀牌（生徒作品受賞）



大正4年（1915）サンフランシスコ万国博覧会 金牌
(文部省の出品依頼により生徒作品を出品)

杉並キャンパス1号館整備の際、旧総務課金庫から3点のメダルを発見しました。戦後、1号館は杉並キャンパスの本部として機能し、理事長室・学長室・事務室・会議室等として利用されていました。

(遠藤九郎/110周年記念事業調査役)

2009年度以前の寄贈資料一覧

2009年度以前に歴史資料室にご寄贈いただいた方や資料内容をここに記し、感謝の意を表します。(50音順)

- 青木純子氏 襟章（昭和20年代）、本学に関わる資料一式 約100点
- 青木すずな氏 入学許可書、卒業証書
- 浅井幸子氏 資料（カタログ）
- 東恵美氏 写真
- 安倍淑氏 卒業証書、教員免許状、卒業記念帖、刺繍参考作品、女子美術学校裁縫研究会著『メートル法による高等裁縫書』全5巻（倉持周治商店出版部、1924年）
- 石川栄子氏 刺繍作品
- 糸崎美都子氏 女子美術専門学校裁縫研究会編現代和服裁縫書. 第1～5巻（倉持周治商店出版部、1934）、富田輝夫『通俗色彩講話』（倉持周治商店出版部、1937）、卒業証書、写真等約30点
- 井上光子氏 写真
- 岩崎英子氏 油彩作品、写真
- 岩佐幸子氏 刺繍作品等
- 宇都見絹子氏 卒業予定者一覧
- 太田秀氏 書簡他
- 大類光恵氏 卒業写真
- 岡田千鶴子氏 写真
- 賀谷喜美子氏 夏期講習会要項、卒業記念帖、教科書、刺繍作品、資料等
- 木内鏡子氏 下図、資料等
- 黒川芳枝氏 『昭和手芸教本 編物・刺繍篇』、作品（造花用パーツなど）
- 小池桃子氏 刺繍作品、写真等
- 小松弘光氏 卒業記念ペンダント
- 小山敬三氏 『アサヒグラフ 別冊』1977年
- 渋谷かつ氏 卒業写真
- 鈴木トウ氏 卒業証書
- 鈴木宏子氏 写真
- 須藤勲子氏 初期シンガーミシン、教科書、下図、刺繍作品、資料等100点
- 武田シズ子氏 刺繍作品、書籍多数
- 武田倭子氏 写真、資料（ポストカード）
- 竹中恵美子氏 資料（カタログ）
- 田沢澄江氏 卒業証書、教員免許状、卒業予定者一覧
- 田辺麗子氏 写真
- 谷口秀子氏 教職員用襟章（昭和30年代）
- 角田美代子氏 資料（カタログ）
- 中川一枝氏 染織工芸展布製ポスター、資料
- 永井信一氏 河鍋暁翠、亀高文子、森田元子、三岸節子、甲斐仁代、丸木俊、片岡球子、入江一子、佐野ぬい等文献資料
- 長尾道子氏 卒業証書、教員免許状
- 中西公子氏 写真、資料（ポストカード）
- 橋崎幸江氏 写真
- 長谷川綾子氏 雑誌資料
- 二見宏子氏 卒業記念帖、教材
- 堀田奈美氏 卒業証書、『手芸図案本』等書籍、染織講義録、図案下図、刺繍作品、写真等約60点
- 堀田奈美氏 卒業証書、写真、作品、書籍資料
- 堀越きん氏 卒業記念帖
- 牧瀬和美氏 資料（ポストカード）
- 松島和子氏 写真
- 宮越洋子氏 写真
- 村山キミヨ氏 写真（摘み画作品）
- 毛利やすみ氏 記念文集、資料
- 森育子氏 1954年同窓会名簿
- 安田綾子氏 卒業記念帖、卒業写真
- 安原俊江氏 卒業記念帖、女子美術学校裁縫研究会著『メートル法による高等裁縫書』全5巻（倉持周治商店出版部、1924）等書籍、写真
- 安田八重氏 卒業写真
- 柳悦孝のしごと展実行委員会 1970年大阪万国博覧会コンパニオン制服（復元）
- 矢野もと氏 写真
- 洋画研究室 東美会作品展図録

2010年度前期 ご寄贈報告

2010年度前期に歴史資料室にご寄贈いただいた方や資料内容をここに記し、感謝の意を表します。(順不同)

●島村輝氏 何香凝著『回憶孫中山和廖仲愷』生活読書新知三聯書店出版、1978

●窪田新一氏 卒業生同士で交わされた葉書 26点 大正初期 ご協力：亀井やす代氏 (同窓会幹事)

●女子美術大学同窓会

1. 教員免許状 (西洋画用器画)

河村愛子 昭和21年 文部省発行

2. 教員免許状送り状 河村愛子 昭和21年 女子美術大学専門学校校長 佐藤進発行ご協力：谷口秀子氏 (同窓会幹事・歴史資料整備委員会委員)

●乗松毅氏 (財団法人乗松巖記念館エスパス21館長) 女子美術大学創立60周年記念碑板 原型 (大理石)

編集後記

女子美術大学は本年、110周年の大きな節目を迎えました。創立記念日である10月30日を前にして第2号発行に至り、ご協力いただいた関係各位の皆様に感謝申し上げます。創立記念日の前後には、例年開催する女子美祭の他に、110周年を記念したシンポジウムや展覧会など多数の催しが開催されます。本学の過去を振り返り、未来の展望を語るよい機会となることと思います。歴史資料室では、今後も資料収集、保管整理、研究などの活動に邁進していきたいと思っております。

(原 聖/歴史資料整備委員委員長)

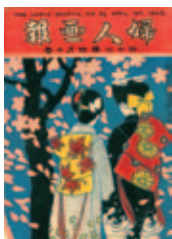
情報提供・ご寄贈のお願い

歴史資料室では本学の歴史・教育内容を伝える資料について収集を行っております。特に、1960年代以前の資料について重点的に収集・調査を行っております。1960年代以前の教材、教員との写真などをお持ちでご寄贈いただける方、または情報をご提供いただける方は、歴史資料室までご連絡くださいますようお願い申し上げます。皆様方のご協力をいただければ幸いです。

表紙写真

私立女子美術学校菊坂新校舎上棟式 写真
明治42年 (1909) 年2月26日

創立時の校舎である本郷弓町校舎は、明治41年 (1908) 10月13日の火災により焼失。同年12月、本郷菊坂において新校舎建設が着手された。この写真は翌年の上棟式の様子で、連なって写っているのは当時の在校生である。この写真は『婦人画報』第25号 (1909年4月) に掲載されたものを転載した。



TEXNH MAKPA 第2号

テクネ・マクラ 「芸術は永し」

女子美術大学歴史資料室ニューズレター

発行日：2010年10月25日

編集・発行：女子美術大学歴史資料室

デザイン：竹田奈那子

制作・印刷：(株)日相印刷

〒252-8538 神奈川県相模原市南区麻溝台1900 女子美術大学3号館4階

TEL：042-778-6754 FAX：042-778-6675

E-mail：heritage@venus.joshihi.jp



美 女子美術大学